

1939年度大接近期に於ける

火星協同観測結果報告 (III)

遊星面課長 伊達英太郎

7. 火星面一般概況

今回の、15ヶ年に一度しか起らぬ所謂“大接近”は、天文ファンが待ちに待ち焦れた現象で、當課としても、手ぐすね引いて待機したのだつたが、期待は多少外れた事を残念乍ら報告しなくてはならない。——と云ふのは、前項にも記した如く、火星の高度が非常に低かつた事と、表面模様が、前2回の對衝に比して、非常に淡かつた事で、これが爲、10種以下の小口經機には、殆んど觀測の餘地が無かつたと云つても良い位の、番狂はせな接近であつた。小口經許りでなく、高度の不足によるシーイングの不良は、氣流の亂れに敏感な中口径反射鏡にも、頗る影響し、前述した様に、筆者の26種は21種に、倉敷のカルズ32種は25種に、口径を絞つて觀測した様な結果に終つた。その爲、15年前の、かの1924年の大接近に示された故中村要先生の記録に遙に及ばない事に對し、課長として私は非常に残念に思つてゐる。以下に述べる記録も、そのつもりで會員諸覽の御判讀をお願いする。

8. 運河

火星觀測に當つて、第一に話題とされる運河 (Canal) は、今回の對衝には、火星の赤道が北に傾く爲、火星の南半球の方が地球へ向く結果となるので、北半球に存在する運河は、見難いだらうと、天界第217號に豫想しておいたが、案の條、否、豫想以上に運河は見難く、ビケリング學派の太い曲つた運河を除いて、ロウエル學派の細いデリケートな運河は、全然と云つて良い位、見られなかつた。それに今一つ、今回の大接近の收獲として、運河の Contrast-Effect (コントラスト効果) が、倉敷の岡林、京都府立一中の樋上兩氏及筆者の3人によつて屢々觀測された事である。

この運河のコントラスト効果 (Contrast Effect) と云ふのは、例を舉げて示すと、白紙に墨で濃淡の部分を作り、これを遠方から見ると、この濃淡の重なる部分がコントラストのため一際濃く線状に見えるが、これを火星に當てはめると沙漠地方の濃淡の接する部分が線状に見え、これが淡い細い運河に見えるのではないかと云ふ説で、これは、ロウエル學派の見取り圖には畫かれてゐないが、モレスワイス等は確認してゐる。故中村要先生も、1924年の對衝にこれを觀測しておられる。

岡林氏の記録に依ると、“運河の大部分は、このコントラスト効果が見出さ

れ、コントラスト効果と迄確言せず共、運河の兩側の地域の濃度が異なるのは、殆んど決定的と云つて良い……”と記されてゐる。

モレスワイス、アントニヤチ等が畫く、太い濃き運河の斑點狀分離（斑點の連鎖）は、渡邊氏と前田氏と筆者の3名により1937年度の對衝に觀測したが、今回の對衝は、運河が認め難かつたため、明確に見られなかつたが、ネベントス、トス、及びセルベス兩運河に、この傾向が認められた。

運河の色相を検出する事も、今回の對衝に對する宿題の一つだつたが、これは不成功に終つた。

ロウエル學派の主張する、淡い細い直線的な運河、ピケリング學派の稱へる濃く太く曲つた運河、アントニヤチの畫く斑點連鎖狀運河等について、其の各々主張する説を比較検討すると、非常に興味ある討論會になるのだが、こゝでは、それが主題でないから、割愛する。要するに、これは、各派の觀測方法、觀測主旨、描法、器械の大小、網膜の感受性等に依る結果である事は、疑ふ餘地はない。當課でも、岡林滋樹、渡邊恒夫兩氏は、比較的細く、前田靜雄、木邊成麿の兩氏及筆者の3名は、比較的太い運河を畫いてゐる。

第2章 觀測結果

第1區 (310°~10°)

〔サベウス灣とエリスレウム海附近〕

この區域で、最も眼につき、又、小口径にも觀望可能な模様は、 -10° の帯を東西に長く横はつてゐるサベウス灣である。特に、この灣の西端に位置するメリディアニ灣(別名“アリンの爪”)は、火星面の模様中、最も濃いものの一つである。このメリディアニ灣の形狀が、1935年の對衝にはマドロスパイプの如き形狀をし、1937年には判然とはしなかつたが、2本の爪形に見られ、今回も中央に子午線の經過の際に、明かに2本の爪形に見てゐた。これは、岡林、木邊、降篠3氏及び筆者の、中口径機を使用したものは全部認めてゐるが、12槓を使用して驚異的な成績を挙げられた樋上氏も明らかに2本に認めてゐる所を見ると、相當明瞭に2本の爪形をしてゐたものと思はれる。

このメリディアニ灣の色相は、全期間を通じて、青灰色に、黑色を混じた如き色を呈してゐた。因にこのメリディアニ灣は、今迄度々記した如く、其名の示す通り火星面の經度の原點 0° が存在する場所である。

このサベウス灣の南に、矢張り東西に、美しいカ1ヴをして横はつてゐる模様が、バンド11海峡で、1935、1937兩年度の對衝には、サベウス灣に次いで濃く見えてゐたが、今回は、25槓級にも殆んど判然と其の形狀が判らぬ位、淡くなつており、シーイングの悪い時には、消失したものだと思ふ位に淡かつた、

このバンド1ラ海峽の西端に接続してゐるマガリチーフル灣は、1937年度程濃くはないが、10糎口径にも見られた位の濃度である。(Fig. 1 参照)

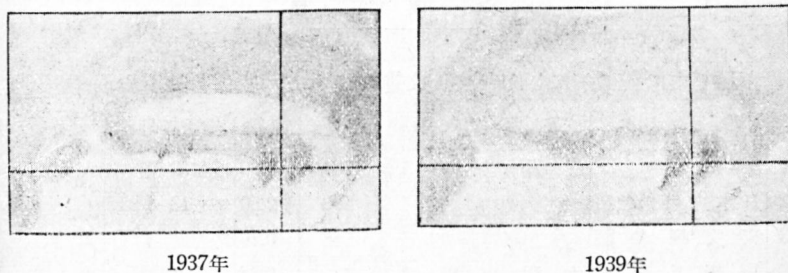


Fig. 1

南へ行つて、例のヘラス大陸の西側のヤオニス海峽は、37年度に比して頗る濃く、大シルチスからズーツと續いて南下してゐるのが素晴らしい景觀であつた。ヤオニス海峽の西方ヘレスポントスも、相當明瞭に認められ、観測に當つては、ヤオニス海峽、ヘレスポントス、サベウス灣の3本の放射狀の海洋部が見られた。

運河——前述した如く、Canal は、今回は非常に見難く、1937年度にはサベウス灣の北方、アエリヤ、アラビヤ、エデンの各沙漠地方一帯に、比較的淡い細い運河が見られたが、今回は、サベウス灣の中央部シゲウス港から北上するフィソン、エウフラテス、又、メリディヤニ灣から同じく北上するヒデケル、ゲホンの各運河を明暗境界線上に認めたのみで、これは特に岡林氏がよく認められてゐる。又、樋上氏も10糎程度の小口径でこれ等の運河をよく畫かれてゐるのは、同氏の観測場所“北山莊”のシーイングの良好な事が伺へる。マガリチーフル灣から北東に延びた第一、第二のオクソス運河は、相當明瞭で、中口径の使用者及び樋上氏に總て認められてゐる。第二オクサスの終點に當るイスメニウス湖は、1937年度御像の中央の少し北方に明瞭に見られたが、今回はDiskの下端スレスレにやつと認められる位置にしか見られなかつたので、小口径には殆んど無理なObjectであつた。降簇氏は、イスメニウス湖を非常に明瞭に大きく畫いておられる。+40°のイスメニウス湖をLimitとして、以北の様子は何も見られなかつた。(未完)

(筆者附記) 火星面模様名稱に就いては天界第217號口繪の火星圖を参照され度い。